
PARTIAL TALE TOKISAME

伊東 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PARTIAL TALE TOKISAME

【Nコード】

N3877D

【作者名】

伊東 光

【あらすじ】

あきれ×苛立ち×失望〃殺意。心の中の数式。探偵は連続殺人事件を解き明かすことが出来るのか。普通の少年と変わった探偵の話の一部分。

「いつから僕が犯人だと気づいたんですか」

時雨しぐれが放課後、静まり返った図書館でひとり本を探しているときのことだった。「今の学生さんは偉いねえ」と自分の倍ほどの年齢である、鯰なまずに後ろから声をかけられた。

「鯰さんじゃないですか。どうです、犯人分かりましたか」

突然、鯰に声をかけられ戸惑ったものの、何とか時雨は平静をよそおい切れた。

「俺が、学生のころなんて図書館自体が無かったからなあ。いや、さすがにあったか。それにしても、いきなり後ろから話しかけられるってのはどんな気分なんだ」

「ハハ、鯰さんの声は特徴ありすぎですからね。すぐ分かっちゃいましたよ」

当たり障り無く切り返しつつ、もう一度「分かったんですか」と鯰に尋ねた。

「分かったよ。当たり前じゃねえか、楽勝すぎ」

その言葉に、まさかとは思いながらも時雨は黙って次の言葉を待った。

「犯人はお前。凶器は、ええと、あれだ、ほらあの丸くて先つちよがさ、」

言葉に詰まる鯰に時雨はあきれつつも答えを明かした。

「そう、その通り。それだ、それ」さも満足げになっているこの男を見ると、時雨はこの人は何をしたいんだとさらにあきれた。あきれの連鎖。あきれの二乗だ。

「で、何が根拠で僕が見事、犯人に選ばれたんですか」

「何だっていいだろ。分かっているヤツに説明するのは、時間の無

駄だぞ」

「ハア、くだらないなあ。ろくな根拠もなしで、いたいけな中学生を連続殺人犯にしてしまうんですか、あなたは」

「なら、あれだ。あれが根拠だ」

その次はあれですか。時雨は鯨との会話に若干の苛立ちを感じる。

「あれって何ですか」

「俺がさっき凶器が何かって説明しようとしたときにさ。お前、すぐに当てちゃったじゃないか。凶器が何か。これでいいだろ、な」

あきれと苛立ちが徐々に募りつつも、こみ上げる感情を抑え会話を続けた。

「言い分けないでしょう」いつのまにか握り拳になっていた手を、さらにきつく握った。

「しょうがねえな。じゃ、一回だけ説明してるよ」

「いつから僕が犯人だと気づいたんですか」

鯨の推理を聞き終わったとたん、時雨はそうつぶやいていた。きつく握っていた拳を開く。うつすらと、手には汗がにじんでいた。

「で、僕をどうします」

自信の壁が、鯨の起こした地震によって打ち砕かれた。そんな感じだった。鯨って地震を予知するだけじゃなかったわけ、と心の隅に幼稚な疑問が浮かび上がる。

「どーしよつかなあ」

鯨の小ばかにしたような言い方に腹が立つ。と、同時にある種の失望を感じる。

あきれ×苛立ち×失望〓殺意の式が出来上がる。

ポケットの中の凶器に触れる。後は、少しのきっかけで頭の内部で爆発が起こるだろう。それが、連鎖反応して広まっていく。収まるころには、苛立ちの原因はもう存在しない。残骸が残る程度だ。

「ふん。どーもしねえよ」

鯨の言い方に、時雨への恐れから来る怯えや媚びが感じ取れなかった。ましてや、時雨を馬鹿にしているわけでも、同情しているわけでもない。良く言えば、達観している。悪く言えば、鈍感なのか。どちらであれ、時雨はただ驚くだけだった。

「俺は、警察でもなけりや裁判官でもない。それに、弁護人じゃないってことも言える」

そこで一呼吸おき、鯨は続けた。

「俺は、探偵だ。探偵の役割は事件の真相を語ることであって解決することじゃない。シヨーク・ジーテイルも言っていただろうが」

「誰ですか、その人」信じるのかい。鯨の言うこと。否。ただ、苛立ちと失望は消えた。自信満々に語る鯨を眺めていたら、本物の鯨を連想した。本物も偽者もどこか物事を、大げさに言えば世界そのものを達観している。鈍感のような気もするが、地震を予知できるぐらいなのだ。実際は鋭い感覚を持っているのかもしれない、と時雨は思う。そんな自分に少しあきれた。

膨らんだ風船を割ろうと、いきおい良く針を刺した。すると、割れるどころか、開いた穴から少しずつ空気が抜け出していつて小さく、しぼんでしまった。そんなところだ。

（後書き）

推理小説と言いながらも、全体の事件と使われた凶器、それらを解き明かす推理も、そしてその後どうなったのかも分からないようにさせていただきました。社会問題を投げかけるのが目的の小説でも、特には無いです。足りないピースを読者の方が勝手に作り出して好きなようにはめ込み、楽しんでほしいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3877d/>

PARTIAL TALE TOKISAME

2010年10月28日03時56分発行